

開催地名：兵庫県加古川市	
開催日時	令和4年1月17日（月） 14:00～15:30
開催場所	加古川市青少年女性センター4階 大会議室
語り部	甚野敬司 （宮城県大和町）
参加者	加古川市役所職員 約100人
開催経緯	防災・災害対応は防災対策関係部署のみが行うものといった他人事意識から、職員として災害に最前線で対応に当たらなければならないという意識が低く、平常時からの災害に対する心構えができていないことが課題である。
内容	<p>(1) 派遣された自衛官から見た東日本大震災の状況</p> <p>自衛隊は災害時、それぞれの担当地域を防衛警備する任を負っている。発災直後、原子炉建屋の水素爆発等、情報が錯綜する中で人命救助と行方不明者捜索を行った。5月移行は除染作業へと従事した。</p> <p>大震災の場合、強い余震が幾度も起こるといった特徴がある。繰り返し地震が来るようなものなので、一度目の地震からの避難中に被害に遭うケースも多い。</p> <p>また、あまりニュースにはならないが、「大震災が起こると治安が非常に悪くなる」という影響もある。窃盗が多発したり、路上で飲酒したりする方も出てくる。管理職の方々は、ぜひ「治安の悪化」を念頭に入れておいてほしい。</p> <p>被災者への癒やしという意味では、入浴は大変人気があった。地元の温泉の湯を運んできて沸かし直した温泉は、被災者の心を大いに癒やした。</p> <p>(2) 原発対応の記憶</p> <p>原発事故の影響があった地域でも被災者の捜索は行われる。タイレックスやウェダーといった防護服を着込んでの対応は、初夏を迎えると気候的にもずいぶん辛いものがあった。具体的な作業としては、被災地の遺留品等を住民の方々にお返しするために二本松市に集積したり、道路を修復したり、環境整備を行った。</p> <p>他には、空間線量を減らすための除染作業も行った。まず、枯葉等を地面から除き、次に、側溝等に落ちたものも丁寧に取り去る。福島県では個人の住宅でも、こういった作業を行っている。敷地内の表土を剥いで、砂利やマットを上を敷く。</p> <p>役場の除染作業も含め、若い隊員たちによる献身的かつ誠実な対応が多</p>

	<p>く見られたことを、今でも誇りに思っている。</p> <p>(3) 最悪の事態に備える、ということ</p> <p>大災害においては、「うちだけは起こらない」という意識を捨てるのが最も重要である。思考停止をやめ、普段から何を備えておくべきかを考える。</p> <p>職場での顔、住民としての顔、親としての顔、友としての顔。人間は状況によっていくつもの顔を使い分けている。その時の自分の立場を理解して、災害時には正しい行動を取ってほしい。阪神淡路大震災の際、私の同期は行方不明の家族を置いて、自衛官としての任務を果たしに来た。しかし、上司は「まずは自分の身内の所在を確認してこい」と送り返したという。それも管理職の一つの判断だと思う。</p> <p>最後に、震災時に大事と感じたことを述べる。まず、停電のときに最も必要なのは灯り。停電したとしても冷凍食品は庫内で1日程度は持つので、備蓄食料として活用すると良い。また、カセットコンロは非常に頼りになる。</p> <p>さらに、自動車の給油はこまめに行うこと。発災してしまうと給油はままならない。休日の前や土日など、ことあるごとに満タンにしておくと思う。</p> <p>大災害時には、家族や身近な者を守れないと市民の負託にも応えられないということを意識して、災害対策に取り組んでほしい。</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around; align-items: center;">   </div>
開催地より	<p>身近な人の命を守ることが1番（家族の安全を一番に考える）であることが強く記憶に残った。災害の恐ろしさを改めて実感したため、阪神淡路大震災の被災者として、自分も伝承者として伝えていきたい。</p> <p>備えることの重要性をあらためて認識できた。</p>
開催地名：京都府京田辺市	